



「良太、まっすぐ三〇メートル。あの隙間、落とせるか」

「うん、やってみる」

良太は、じいちゃんと寺泊の防波堤に、アジ釣りにきていた。夕ま<sup>\*</sup>ずめ、大ぜいの人が夢中になっている。となりとの間がせまいので、サオを投げたときに少しでも脇にそれると、となりとからんで迷惑をかけてしまう。

良太のおもりは、ねらいどおりの場所にぽとんと落ちた。しばらくして、ぼこんと浮きが立つ。

「よし。OKだ」

「ああ、よかったー。あつ、じいちゃんのサオ、引いてるよ」

良太が、指をさした。浮きが見えない。

「でかいよ。もぐったまんま出てこないもん」

じいちゃんはいすから立ち上がると、サオを手にリールをまきはじめた。サオが大きくしなう。やがて水中から、浮きがゆるやかに顔を出し、そのあとからアジが姿をあらわした。

「大っきい。さすがだね」

手にしてみると、二五センチほどあった。

「これは、夕飯のサシミだな」

じいちゃんがぼそっといいながら、クーラーにおしこんだ。

夕日が佐渡の島にかかり、風も止んで、釣り人にとって一番のかせぎ時。水面が夕日に赤く照らされ、きらきら輝いている。

良太は、小学校の三年生。学校に入る前からじいちゃん